小山工業高等専門学校研究紀要
第三十七号（二〇〇四）二五三－二六二

豫園の研究 ― 人文学の観点から ―

A study of Yu Yuan
From the Viewpoint of the humanities

中田伸一
Nakata Shinichi

一　はじめに

豫園は上海市内にある著名な古典園林である。外灘に程近い、豫園商城と城隍廟の東北の隅にあり、東は安仁街、西は福佑路と境を接している。二ヘクタール（三十畝）ほどの南北に細長い土地に、現在、三十余りの古典的な建物（庁、堂、楼、閣、斎、室、軒等）が並んでいる。その間には、築山、池水、花木が配置され、いくつかの曲廊が建物間を繋ぎ、あるいは空間を分割している。一九八二年には国務院より、古建築及び歴史記念建築物として、「全国重点文物保護単位」に指定された。

一帯は上海有数の観光名所となっている。商場を含めた広域の豫園は上海でも指折りの繁華街であるが、その一角に城隍廟がある。都市の守護神を祀った霊廟である。中国のすべての都市において、信仰の中心であり繁華街であるが、上海も例外ではなかった。上海城隍廟は、明の永楽年間（一四〇三～一四二四年）には信仰の中心となり、さらに、商業、文化、風俗の中心となっていった。商人や郷紳の精神的な拠り所であり、県城の影の統治機構だった。豫園は上海の発祥地とも言える城隍廟に隣接して建ちあがった。

豫園の原型ができたのは、明の嘉靖三八年（一五五九）である。潘允端（一五一五～一六〇一）という富豪が、自宅の菜園に築いた花園がその始まりであった。当初七十畝の広さがあった。

父の恩は、正史に伝記を持つ明朝の高官、允端自身も嘉靖四一年、科挙試験に合格して官僚になった。工事は「屢作屢止」という状態ではかどらなかったが、二十年近い歳月をかけて、珍石や銘木を集め、二十ほどの建物を作った。「豫園」の名は、両親に晩年の愉しみを供したい、という願いから出た。竣工した万暦五年（一五七七）に書いたとみられる『豫園記』には「取愉悦老親之意也」という説明がある。「豫」には「平安」「安泰」の意味がある。

築園工事は当時の著名な造園家である、張南陽（一五一七～一五九六）が采配を揮った。この人は上海人であり、初めは父から絵画の手ほどきを受け、後に造園に転向した。特に黄石を使った築山づくりを得意とした。張の晩年の傑作として世評が高かったものに、豫園、山園（王世貞の私邸）、日涉園（陳所蘊の書斎）がある。陳所蘊の書いた「張山人伝」によると、「唯時呉中潘方伯以豫園勝，太倉王司寇以弇園勝，百里相望，為東南名園冠，則皆出山人之手。」と賞賛されたという。しかし、三園のうちの弇山園と日涉園は既に無くなっているので、現存するのは、豫園内の築山、大假山だけである。

歴代の高級官僚は副収入を得る機会が多く、莫大な財産を築く者が多かった。潘氏もそういう部類であった。当時の俗言に「潘半城、徐一角」つまり、潘氏は城内の半分を所有し、徐氏（明代の科学者徐光啓の一族）は一角を所有している、という言葉があった。また、父と弟と共に科挙官僚として出仕したので「一門三進士」と称された。しかし、潘允端は職務に深入りすることなく、万暦五年（一五七七）四川布政使を最後に、辞職して上海に帰った。その年に豫園は竣工した。彼はここに住み、隠居後を享楽的に過ごした。宴会や観劇の席を設け、書画の収集、蟋蟀の愛玩、凧揚げなどの趣味に打ち込み、祭典の主宰などをして、僧尼、妓女、芸人、文人たちと交流した。その中には、前述した王世貞や董其昌といった大物文人がいた。官界を引退したあと、市隠（市井の隠者）として自適する生活は、裕福な知識人の望むところであった。允端は少なくとも物質的にはそれを実現した。

「園林」という言葉は日本では耳慣れない。私たちは「庭園」「公園」

という言葉をよく使うが、これらは和製漢語である。「にわ」と「その」という和語が結合して「庭園」となり、英語のパブリック・ガーデンを逐語訳して「公園」となった。日本の公園のモデルは西洋にあり、明治三年、横浜の山下公園が日本初の洋式公園であった。「庭園」「公園」は現代中国語にも入っているが、日本からの伝来語に他ならない。こうした背景をふまえると、中国風の林泉や花園を建物の周りに配置した豫園は、やはり「園林」という呼称がふさわしい。

二〇〇四年三月、私は初めて豫園を訪れた。日本庭園とはずいぶん印象が異なる。異次元空間に迷い込んだ気分になり、しばらく歩き回った。そして魅かれた。しかし、何に魅かれたのだろうか。ひとつ確かなことは、観光客として気楽に園内をめぐっているうちに詩興が湧いてきたこと。次の七言絶句は、そのときの一首である。

陽春三月市声喧　陽春三月　市声喧なり
我亦尋芳入豫園　我も亦　芳を尋ねて　豫園に入る
漫賞石叢塵外趣　漫りに石叢を賞するは　塵外の趣
亭陰笑語向誰温　亭陰の笑語　誰に向かって温かなる

同じ年の七月、もう一度豫園を訪れた。こんどは、観光ではなく、意識的に観察して歩いた。建物の名前を地図で確認しながら、配置や構造を知り、池を巡り、石組みを眺め、花木鳥魚などを見た。豫園にはたくさんの人々が持ち込んだ、扁額、対聯があり石碑、彫刻、家具調度といった文物がある。これらが独特の空間を作っている。長い時間をかけてできあがった総合的な藝術空間と言ってもよい。園内には五感で把握できるものの他に、できないものもある。例えば豫園の歴史、築いた人々の意識、ここに遊び、扁額や対聯を持ち込んだ人々の意識など。本稿では、こうした人文学的な要素について多く考えたい。

次の第二章では、豫園を誕生させた、潘允端の人物像や意識を探ることにする。第三章では、潘氏亡き後、豫園はどのような歩みをたどったのか。その変遷を調べる。第四章では、豫園に残る扁額、対聯について検討し、豫園に文化を持ち込んだ人々の意識を探る。

二　豫園創建

潘允端の伝記は『明史』列伝第九二、父親の潘恩の伝に付随して簡単に記されている。万暦二九年（一六〇一）に「卒年八十七」で一期を終えていることから、正徳一〇年（一五一五）生まれとわかる。允哲という兄、允亮という弟がいた。官吏としては父潘恩の方が出世した。恩は字は子仁、上海の人。嘉靖二年（一五二三）の進士で、官は都察院左都御史、刑部尚書という中央の高官に達した。『潘尚書集』という詩集があり、『明詩綜』や『盛明百家詩』に詩人として登録されている。

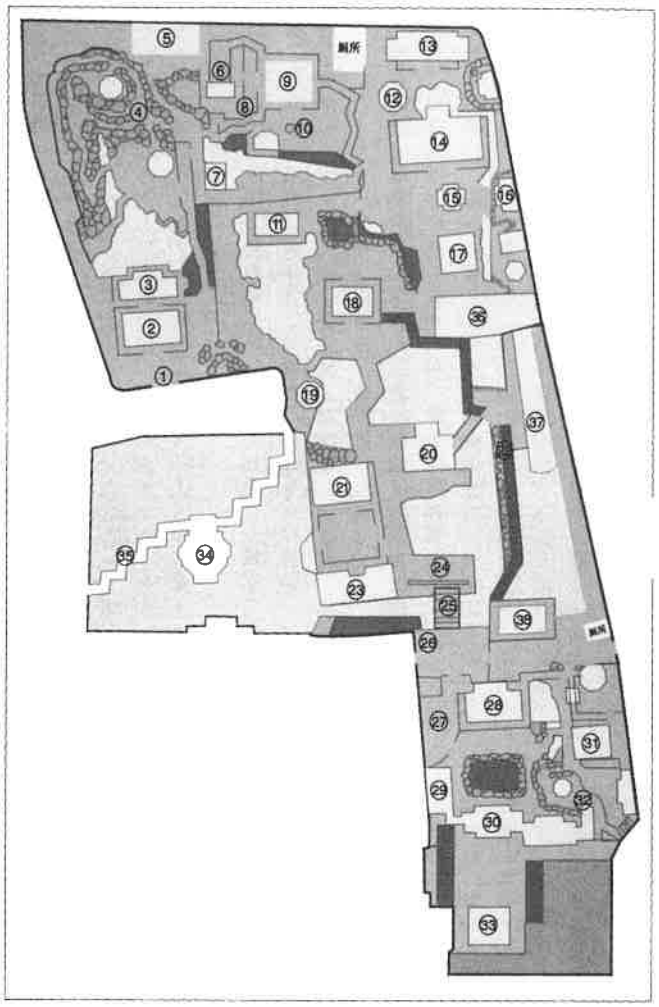
父子に共通しているのは、豪華な邸宅づくりに熱心だったことである。恩は嘉靖六年（一五二七）に「建築規模、上海に甲たり」と称された、四志堂等の建物四棟を建てている。允端は嘉靖三二年（一五五三）に、世春堂という、占地面積六千平方米、建築面積一三一五平方米の、宮殿のような邸宅を作った。その六年後に、その西側の菜園に私家花園として建造を始めたのが、後の豫園である。工事は順調にはかどらなかった。建設の経緯を記した『豫園記』には「垂二十年、屡作屡止、未有成績」とある。

潘允端の官職歴はおよそ次のようなものである。嘉靖三八年（一五五九）に郷試を受けたが不合格。三年後にようやく科挙に合格して進士となった。後、刑部主事、礼部主事、南京工部主事、分管漕運となり、万暦五年（一五七七）に四川右布政使に抜擢された。布政使という官職は明の洪武九年（一三七六）に中央に初めて設けられ、後に、全国十三の地域に置かれた最高行政長官である。しかし着任早々、張益という者から弾劾された。『明史』には「給事中張益劾允端奔競」と書いてある。当時の政界には複雑な党争があり、士大夫は「何時顛落するか知れない不安定な階級」であったことは、宮崎市貞博士の論文「明代蘇松地方の士大夫と民衆」（注一）に詳しい。允端は、どろどろとした人間関係を清算するかのように、六三歳の年に上海に戻ってきた。そして、豫園を拠点にして市隠として安穏に暮らす道を選択したようである。『豫園記』には、建設初期のおよそ二十年間のことが次のように書いてある。

余舎之西偏、旧有蔬圃数畦。嘉慶己未、下第春官、稍稍聚石鑿池、構亭藝竹、垂二十年、屡作屡止、未有成績。万暦丁丑、解蜀藩綬帰、一意充拓、地加辟者十五、池加鑿者十七。毎歳耕穫、尽為営治之資。時奉老親觴詠其間、而園漸称勝区矣。

（訓）余の舎の西偏に、旧蔬圃数畦有り。嘉慶己未（一五五九年）、春官に下第し、稍稍石を聚め池を鑿ち、亭を構え竹を藝え、二十年に垂んとして、屡作り屡止まり、未だ績を成さず。万暦丁丑（一五七七年）、蜀の藩綬を解かれて帰り、一意充拓、地に辟を加ふる者十五、池に鑿を加ふる者十七。毎歳の耕穫、尽く営治の資と為る。時に老親の觴詠を其の間に奉りて、園は漸く勝区と称せらる。

さて、潘允端は老親のために「寿楽堂」という建物を作った。「堂」は土を高く盛り上げて作った正殿。『豫園記』によると、寿楽堂は朱塗りの柱と壁を持ち、彫刻や象嵌で装飾した建物であった。内部の居住空間には二つの「室」があり、左を「充四斎」と名づけ、母親の部屋とした。「充四」は允端の幼名らしい。右を「五可斎」と名づけ、父親の部屋とした。「五可」とは「有親可事、有子可教、有田可耕、有山可樵、有沢可漁」という短句に基づいており、そのネーミングには、自由洒脱な気風や悠々自適の嗜好が感じられる。「愉悦老親之意」を注いで作った豫園のなかで、寿楽堂は中心的な建物と考えられるが、その完成前に老親は他界した。『豫園記』のなかでは「嗟嗟、楽寿堂之構、本以娯奉老親、而意以力薄愆期、老親不及一視其成、実終天恨也。」と表現しており、無念の思いが強く表れている。潘允端の住まいは楽寿堂の東側にあり「容与堂」と名づけた。内部には琴や書物、鼎や彝（青銅器）を並べ



豫園平面図（現在）

1. 大　門
2. 三穂堂
3. 仰山堂
4. 大假山
5. 萃秀堂
6. 亦　舫
7. 魚楽榭
8. 復　廊
9. 万花楼
10. 銀杏樹
11. 九狮軒
12. 古井亭
13. 藏宝楼
14. 点春堂
15. 打唱台
16. 快　楼
17. 和煦堂
18. 会景楼
19. 流觴亭
20. 玉花堂
21. 得月楼
22. 積玉水廊
23. 藏書楼
24. 玉玲瓏
25. 環龍橋
26. 出　口
27. 内　園
28. 静　観
29. 観涛楼
30. 還雲楼
31. 可以観
32. 船　舫
33. 古戯台
34. 湖心亭
35. 九曲橋
36. 老君殿
37. 听涛閣、展庁
38. 涵碧楼

ていた。二階は「頤晩楼」と命名し、厨房や浴室を設けた。

容与堂の東側には、一室のみを有する堂を設け、末子の云献を住まわせた。「便其定省、其堂曰愛日、志養也。」（『豫園記』）という記述に、親としての姿勢が窺える。「定省」というのは「昏定晨省」（『礼記』曲礼）の略。親に仕えて晩にはその寝具を整え、朝にはその安否如何を問うこと。息子にそういう躾をしたかどうか定かではないが、「愛日堂」と名づけた子供部屋を作って、棟を並べて住んだこと、「孝」を重んじたらしいことが推測できる。

以上、「楽寿堂」「容与堂」「愛日堂」は、潘家の日常生活の場であったことを確認した。『豫園記』には他に多くの建物名が出てくる。種類ごとに書き出してみる。

堂　：楽寿堂、容与堂、愛日堂、玉華堂、会景堂
楼閣：介楼、酔月楼、徴陽楼、頤晩楼、純陽閣
軒庵：魚楽軒、大士庵
亭　：涵碧亭、鳧佚亭、挹秀亭、留影亭
祠　：関侯祠、山神祠

これらの建物が、どういう目的用途を有していたのか『豫園記』によってある程度まで知ることは出来るが、不明な点もある。細かくつついてもあまり意味はなく、かえって次のような区分の方が、園主の創造意図に近づけると思う。

一群：住居・生活区（楽寿堂、容与堂、愛日堂、玉華堂）
二群：祭祀・修養区（純陽閣、徴陽楼、関侯祠、山神祠、大士庵）
三群：造園・社交区（介楼、酔月楼、頤晩楼、魚楽軒、涵碧亭、鳧佚亭、挹秀亭、留影亭、会景堂）

第二群の純陽閣は呂洞賓を祀った道教の建物。徴陽楼は図書館。関侯祠は関羽、山神祠は土地神を祀った祠。大士庵は禅室である。

第三群の建物は、園内の要所に配置した庭園観賞のためのもの。その間を埋めているのは、樹木、石、池、築山、曲廊の類であり、園主と造園家の共同作業によりうまれる人工の自然空間、つまり園林である。そこは、園主と家族のために作られた閉鎖的な空間ではなく、来客と園主が交流する場である。文人ならば、人工山水を歩きまわり、風景を観賞し、ある者は琴曲を奏で、茶をたて、詩を創り、書画の筆を執る。

園林は前述したとおり、珍しい木石を並べ、鳥魚の類を飼育する、贅沢な空間でもある。潘允端は蓄えた資金の多くを「石」に振り向けたであろうと推測できる。彼の蒐集した石のうち、その価値が語り継がれているものとして、「玉玲瓏」という太湖石の逸品があり、「大假山」という築山がある。

玉玲瓏について『豫園記』では「蓋石品之甲、相伝為宣和漏網」と自賛している。「甲」は最高の意味。「宣和の漏網」とは、北宋の宣和年間に行方不明になった石、という意味。徽宗皇帝が首都開封の東北に艮岳を築かせたときに、舟を使って全国の名花奇石を運搬させた。（花石綱）玉玲瓏は太湖から運んできた石の一つであったが、折しも農民反乱が起り、所在がわからなくなった。

明代には、上海浦東の儲晃の花園である南園にあった。儲家の娘は潘恩の三男（允端の弟）に嫁いだことから、両家は親戚であった。儲晃が亡くなると、後継する子息がいなかったことから、玉玲瓏は豫園に移された。伝説によると、黄浦江を船で輸送中に浸水、底に沈んでしまった石を大勢の潜水夫に引き上げさせたという。

允端と交流のあった王世貞（一五二六～九〇）は、豫園で見たに違いない。この石を讃えた詩がある

圧尽千峰聳碧空　千峰を圧し尽くして　碧空に聳ゆ
佳名誰並玉玲瓏　佳名　誰か玉玲瓏に並ばんや
梵音閣下眠三日　梵音閣下　眠ること三日
要看繚天吐白虹　要(かなら)ず看ん　繚天に白虹を吐くを

玉玲瓏は今日も豫園に屹立し、観光客を迎えている。この石は蘇州の瑞雲峰、杭州の綴雲峰と共に、江南の三大名峰に数えられている。

潘允端の石に対する強い好尚は、大假山という築山にも窺える。『豫園記』では「峻嶒秀潤、頗陋観賞」と形容しているこの山は、数千トンの浙江武康の黄石を使った、高さ十四メートルに積み上げた。工事を担当したのは、前述したとおり、張南陽であった。

潘允端は豫園を作るのにどの程度の資金を使ったのだろうか。『豫園記』には簡潔にこう書いてあるだけである。「毎歳耕穫、尽為営治之資」。地主として土地から上がる収入はすべて園林の造営に費やしたのである。その甲斐あって万暦の後期に竣工した。「園漸称勝区矣」という言葉は、その時期のものであろう。

潘允端には十五年間書き続けた日記がある。一五八六年に書き起こされ、一六〇一年で終わっている。『玉華堂日記』という。玉華堂は彼の書斎のあった建物であり、その正面には太湖石の逸品玉玲瓏が据えられていた。現在も玉華堂は建っているが、清の乾隆年間に同じ場所に重建されたものである。その日記は今、上海博物館に保存されている。

三　豫園小史　荒廃と修復の軌跡

潘允端は豫園に二十余りの建物を残してこの世を去った。今日、ここには三十余りの建物群がある。しかし、彼が築かせた建物は一つもない。当時の遺物として今日残っているのは、玉玲瓏、大假山といった石組み、鉄製の工芸品や陶瓦のような、燃えないものだけである。ある時期に、すべて無くなるような異変に襲われたと考える他はない。奇怪なことである。

允端の豫園が滅びたシナリオは不明であるが、明代末期の混乱した世相が影を落としているに違いない。宮崎市貞博士の論文によると、士大夫階級は、中央では卍に入り乱れた党争があり、郷里においては民衆から抵抗を受けやすく、何時顛落するか知れない不安定な階級であったという。具体例として、上海松江出身の董其昌（一五五五～一六三六）の私邸が民衆に焼討ちされた事件を挙げている。（董其昌は潘允端と親交があった。）明末になると、民衆が士大夫を襲う「民捗」「民変」「激成民変」という暴力沙汰が頻発した。（注一）潘允端亡き後の豫園にも、この種の修羅場があったに違いない。

ところで豫園には、園主や工事責任者が、新築、改修のたびに残した碑文がいくつかある。豫園の過去をある程度までは読み取ることができる。年代順に列記してみる。

〔碑文名〕	〔撰文者〕		〔撰文の時期〕
豫園記	潘允端	明	万暦（一五七七年？）
西園記	番鐘呉	清	乾隆（一七八四年？）
西園萃秀堂記	葉維庚	清	嘉慶丙子（一八一六年）
重建得月楼綺藻堂記	王萃龢	清	光緒二十（一八九四年）
重修内園記	周梅谷		中華民国一（一九一二年）
重修豫園東部記	陳従周		中華人民共和国（一九八七年）

これら碑文は現地に行かないと見ることができないが、文字を写し取って解釈した小冊子がある。『文以興游－豫園扁対、碑文賞析』（注二）という。これを参照すると、次のような豫園小史を描くことができる。

明朝の末年に、張肇林なる人物の所有地になった。この人は潘允端の孫娘の婿であり、官職は通政司参議（重要書類を扱う文官）に至った。

清の康熙初年の頃には荒廃が進み「草満池塘、一些地方成了菜畦、秀麗景色已成一片荒涼。」（上海市地方志資料）という有様だった。

康熙年間に「同業公所」の占有地となり、集会や会議の場になった。（『重修内園記』）

潘允端の着工より二世紀を経た乾隆二十五年（一七六〇）、地域住民が資金を出し合って土地を買い戻した。さらに修復工事が始まった。『西園記』には次のように書いてある。

西園在城隍廟西北、即明潘方伯豫園故址。乾隆二十五年、邑人相与醵金購其地、仍筑為園……。

「西園」というのは豫園に新しく与えられた名前である。城隍廟の西北を占めていたことに由来する。工事は長期にわたり、費用は嵩んだ。着工してより二十四年後の乾隆四九年（一七八四）には完成したらしい。番鐘呉は『西園記』に次のように書いて、名勝がよみがえったことを喜んでいる。

歴二十余年、所費累鉅万。功将告成、歳甲辰。……遂得暢覧園亭、喜百数十年名勝湮没之区、儼然復覩其盛。

『西園記』によると、この乾隆の大修復よって再建または新築されたのは、次の建物である。

庁堂：玉華堂、三穂堂、蓮庁、凝暉閣、清芬堂、萃秀堂、致遠堂、
楼閣：得月楼、花神閣、听濤閣、涵碧楼、磬楼、凝暉閣、飛丹閣、吟
雪楼、春禊閣、吟雪楼
軒庵：可楽軒、緑蔭軒
亭　：香石亭、挹萃亭、鶴閑亭
其他：緑楊春榭、流觴処、熙春台、憩舫、濠楽舫、茶墻酒墅、緑波廊

これらの建物リストを見ると、二十棟余りを建てた潘允端の豫園を上回っている。その名称については、潘允端が書斎に名づけた「玉華堂」および、かつての涵碧亭が西園では涵碧楼という名で残った以外、すべて新しく命名された。

乾隆の大修復によって最も大きく変わったのは、園林の性格である。潘允端の時代には私園であったから、限られた人たちしか出入りできなかった。しかし、乾隆の大修復の後は、城隍廟の付属園林として、一般公開されるようになり、公共性が加わった。「西園記」の最後の部分にこう書いてある。

庶几都人士女、来游来歌、則斯園也、足与千秋廟貌、并垂不朽矣。

請い願わくは、多くの士女に遊び歌いに来て欲しい。そうなってこそ千秋の歳月親しまれ、後世に継承されるであろう。この文から、市民に開かれた公園を標榜していることがわかる。その結果、毎月の新月と満月のとき、あるいは元日、元宵節、端午節、中秋節、重陽節等の節日に市民に開放された。四月の蘭花観賞、九月の菊花観賞などの花見も園内で挙行された。

道光年間(一八二一～五〇)になると、豫園は再び荒廃した。各公所(同業組合)は、土地を分割して勝手に塀をかけた。第一次アヘン戦争の勃発後の、清の道光二二年(一八四二)イギリス軍が上海に侵攻、湖心亭に司令部ができた。西園は軍隊に占拠され、園内の景観は破壊された。当時の様子を曹晟という人はこう書きとめた。

一望凄然、繁華頓歇……園亭風光如洗、泉石無色。

咸豊三年(一八五五)小刀会が上海を占拠した際に、園内の点春堂を指揮所とした。翌々年に清軍が侵攻、点春堂一帯も戦火に包まれた。咸豊十年(一八六〇)太平天国軍に対して英仏連合軍が防衛に当り、豫園はフランス軍が駐屯した。五年後に撤退したが、園内は無残な有様であったという。

時代は下って、大正十年(一九二一)に芥川龍之介は大阪毎日新聞社の特派員として豫園界隈を訪れた。その紀行記録にはみすぼらしい印象しかなかったようだ。「湖心亭と云えば立派らしいが、実は今にも壊れ兼ねない、荒廃を極めた茶館である。……」(『上海游記』)と書き、そのあと園林には入らずに、城隍廟に寄って帰った。

中華人民共和国成立後の一九五六年より、豫園の修繕が始まった。六一年九月より一般公開された。

九　獅　軒

三　穂　堂（内景）

八二年、国務院は「全国重点文物保護単位」に指定した。八七年には豫園東部の修復工事が行われた。この総監督は、同済大学教授の陳從周（一九一八～二〇〇〇）であった。この工事の詳細は、その当時陳氏に師事していた日本人留学生、木津雅代氏の著書『中国の庭園』（注三）に紹介されている。

以下、四世紀半の豫園の歩みを整理してみる。潘允端の私園として発足した豫園は、園主亡き後、壊滅的な打撃を受けた。その後、幾たびか園主が交代し、清代の初期に、城隍廟の付属園となった。乾隆の大修復によって豫園はかつての勝景取り戻した。それを可能にしたのは、郷紳、篤志家、文化人たちの財力と志であった。西欧列強の中国進出と歩調を合わせるように、上海は江南随一の港湾都市として発展、物流の動脈である黄浦江に近い豫園は、しばしば侵略されて荒廃した。た。例えば、第一次アヘン戦争、太平天国の乱、英仏軍の進駐等に際して、宿営地や武器庫となった。しかし、平和が戻ると、かつての美観を復元しようという声が挙がり、資金が集まり、修復工事が進捗し、名園が復活する。荒廃と復興を重ねて、豫園は上海の歴史文化を象徴する史跡となった。中華人民共和国の成立後は、上海市と国家の保護を受けた。一九八二年に国務院より「全国重点文物保護単位」に指定され、八七年には修復の遅れていた園内東部が陳從周氏の監督下で行われた。

四　園林の文雅　名づけ、扁額、対聯

作り手の側から見た園林は「もの作り」である。そこに技術が生まれ、技術は伝承されて磨きがかかる。明の崇禎四年（一六三一）には、計成によって造園の理論書『園冶』が書かれた。「人作に由ると雖も、宛も天開に自るがごとし」という理念がよく知られている。章立ては次のようになっている。見れば、園林作りはさまざまな工程や技術の集大成であることが窺える。

第一巻　興造論　園説　相地　立基　屋宇　装折
第二巻　欄桿
第三巻　門窓　楹垣　鋪地　掇山　選石　借景

「興造論」では「三分匠、七分主人」という当時の諺を紹介している。「匠」は技術を持った専門職人、「主」は造園の主役として、構想を持ち、全体を監督する者であろう。すぐれた園林になるかどうかは、匠の腕前三分、主の腕前七分にかかっている、という。「主」の役割が大きい。『園冶』はさらに「主」の役割を重く見て、「主九分」と言っている。その理由については何の説明も無いので、その主張の根拠は推測するしかない。私なりに考えてみる。

中国の園林は、さまざまな工程や技術の集大成である、と先に述べたが、園林作りは「もの作り」の要素の他に、総合芸術空間に「仕上げる」という要素もある。言い換えると、工事を請け負い、設計施工監督をする他に、彫塑、絵画に通じた造形芸術家であり、扁額や対聯を扱える書法芸術家であることが求められる。『園冶』の言う「主人」は、造園家と文人風の見識を兼ね備えたマルチタレントであり、園林の良し悪しを決めるキーマンなのである。

造園と詩文作りに共通点がある、と言ったのは清の銭泳であった。

造園如作詩文、必使曲折有法、前後呼応、最忌堆砌、最忌錯雑、方称佳構。

造園は詩文を作るごとし、必ず曲折を使ひて法有り、前後に呼応し、最も堆砌を忌み、最も錯雑を忌む。方に佳構と称すべし。

中国美学は「意境」を特に重視する。詩には詩境があり、詞には詞境があり、書には書境があり、画には画境があり、音楽には音楽境がある。造園の手法に通じるには、それらの文学芸術の意境を、山水花木、建築築山に導き、あるいは交流させる技術が要る。かくして中国園林は、中華文化の意境が融合する、独特の空間になる。

園林作りの最終段階は、園内の山水花木楼閣亭台に名前をつけることである。名づけには、物を人間側に引き寄せる意味があり、園主らの意識を投影する働きがある。被造物は名前を与えられ、遊覧者に覚えてもらうことによって社会性を獲得する。名づけと前後して、園内の要所に、扁額や対聯がセットされる。扁額とは建物に掛ける額であり、対聯とは

柱などに掛ける対句の書である。どういう言葉を選び誰に書いてもらうか、園主は考える。

清代の小説『紅楼夢』には、完成したばかりの大観園という私邸に名前をつけ、扁額対聯の文句を考える現場が描かれている。賈政という富豪の娘が、皇室に仕えて貴妃となり、間もなく里帰りをするのに合わせ、賈政を中心にして園内の下見をする場面である。賈政は額や聯の文句を依頼されてこう答えた。（第十七・十八回）

「この額や聯というのはなかなかもってむずかしいしごとだな。すじからいえば貴妃にお願いしていただくべきところだが、貴妃とて、実地にご覧ならぬことには、おそらくこしらえごとはお引き受けくださるまい。かといって貴妃のお出ましを待ち、さてそれからというのでは、これほどの大景の、どの亭榭にも命名一つしていない結果となり、これもさびしくっておもしろくない気がする。いくら花柳山水ばかりそなわっていても、さっぱり風情なしということになってしまおうよ。」

取り巻きの連中が相槌をうってこう言う。

「お殿さまのお考えはまことにごもっとも千万。いまてまえどもの愚見を申し述べさせていただきますれば、いずこにせよ、扁額・対聯がなくてはなんとも恰好がつきますまい……」（伊藤漱平訳）

賈政はその後、一族の賈珍や取り巻きの食客たちと一緒に、園内を散歩しながら、各所に名前をつけさせ、扁額や対聯の文句を考えさせる。その丁々発止のやりとりはなかなかおもしろいが、引用すると長くなるので割愛する。そして元宵節の晩に、元春貴妃が大観園に立ち寄る。賈家は貴妃に対して公式に命名を要請する。その結果、大観楼をはじめとする主要な建物に名前がつき、また、四文字の扁額十数個が園内に配置されて、画竜点睛と相成ったのであった。

潘允端の豫園においても、名づけや扁額・対聯の語句選びは允端を中心に進んだであろう。第一章の冒頭に書いたとおり、豫園には「愉悦老親之意」を籠めた。老親の住まいには「寿楽堂」という名がついた。母親の部屋は「充四斎」、父親の部屋は「五可斎」と名づけた。「五可」とは「有親可事、有子可教、有田可耕、有山可樵、有沢可漁」という短句に基づいており、そのネーミングには、自由洒脱な気風や悠々自適の嗜好が感じられる。自分の住まいは「容与堂」と名づけた。二階は「頤晩楼」と命名した。末子の云猷の住まいは「愛日堂」と名づけた。

遊び手の観点から豫園を見るときに、文人墨士の果たした役割に注目したい。写真二を御覧いただきたい。これは三穂堂の堂内を撮影したものである。ここには三つの扁額、一つの対聯、一つの書額がある。扁額は上段から「城市山林」「霊台経始」「三穂堂」と書いてある。対聯は左右の柱に、金文字で縦一行に書いてある。中央の書額は、潘允端（初代の園主）の「豫園記」を潘伯鷹という現代書家が墨書したものである。豫園内にはこうした扁額、対聯、書額の類が百点以上あり、門、庁堂、柱、壁、回廊などにセットされている。見方を変えれば、有名無名の文人墨士の作品の収蔵展示のための空間になっている。文化空間あるいは芸術空間が豫園の随所にあり、それが豫園に独特の風韻を添えているのである。

「城市山林」は、道光六年（一八二六年）、兵部侍郎翰林院編修陶澍によって書かれた。当時の上海は、江南の交易の中心として発展し、都市化が進んだが、豫園には山林の趣が残っていたので、この四文字に陶は思いを込めたのであろう。

「霊台経始」は『詩経』大雅・霊台の中の一節「経始霊台、経之営之。庶民政之、不日成之。」から採った。「霊台」というのは、周の国王が天を祭り、天上の瑞祥を観察するときに登る高台のこと。国事として使う祭祀用の台であるから、一般の園林に使われるような言葉ではないが、三穂堂は豫園の中では格式の高い建物であり、特別な役割を持つ建物であることを示す。

豫園内には、これら扁額、対聯、書額さらに碑刻に刻まれた短句、詩句、文章が百件ほどある。大部分は名家の手跡である。これらの文字に、豫園を支えた人々の意識の断片を見ることができる。それら芸術的文飾と文学的な文飾の豊かさは、文字の国中国の表現形式の一つであるが、同時に、豫園という古典園林の持つ特徴でもある。

『論語』に「文質彬彬」という言葉がある。文雅と質朴の配合宜しきを得るに価値を認めてきた伝統がある。文雅な空間にすることは、園林作りの仕上げなのである。

五　むすび

朱門酒肉臭　朱門には酒肉臭く
路有凍死骨　路には凍死の骨有り

この句は、貧富の差の大きな社会に生きた杜甫が、その理不尽さを十文字で端的に示したもの。八世紀半ばの唐の都長安にあった世相は、十七世紀半ばの豫園の周りにもあったことだろう。中国社会は伝統的に、貧富の差が広がりやすく、皇帝であれ闇商人であれ、権力の集中するところに富が集まった。有り余る富は欲望を拡散し奢侈を生む。

上海の潘氏は、親子三人が科挙官僚となり（一門三進士）、俗に「潘半城」と言われるほどの資産家になった。潘允端はその一部を園林づくり投資した。外周を牆壁で囲み、内苑に二十余りの建物をつくり、奇石珍木を集めた豫園は、見方によっては「小さな租界」と言えよう。設宴、演劇、玩蟋蟀、凧揚げ等の遊興があり、祝寿祭祖の儀式があり、骨董書画を蒐集した豫園には文人、名士、僧侶、役者、妓女らが出入りした。しかし、私欲を極めた潘允端の亡き後は家運が傾き、豫園は荒廃した。

十八世紀の後半、清の乾隆年間に、かつての勝景を取り戻そうと考えた在郷商人や知識人の運動が実を結び、豫園は復活した。すべての建物は新築または修復され、建物の数はさらに増えた。市民に内苑を開放しよう、という公共意識も育った。この変化は、上海の都市化が進み、憩いと交流の場を求める人たちが増えたことと無縁ではあるまい。近代市民社会を誕生させた西欧では、十九世紀に市民のための公園が生まれ、日本においても、江戸庶民の憩いの場所が十八世紀の初頭にはあった事実と軌を一にする。（注四）維持管理のために巨額を要する大園林は、公的な管理下に置き、一般開放することが存続の鍵であることに人々は気づいた。

豫園は近代以降、外国貿易と商業によって発展膨張する街の中心にあったことから、再三再四、紛争や戦火に遭い、時に軍隊の駐屯地になって荒廃した。しかし、平和になると修復運動が開始された。二十世紀になっても、外国軍の侵略、内乱、文革という冬の時代はあったが、一九五六年から五年間をかけて、上海市文化局や同済大学の連携により全面修復工事がなされた。六一年には対外開放されて観光客の受け入れがはじまった。最後の修復工事は八七年に、同済大学の陳從周教授の監督の下に行われた。

個人の奢侈から生まれ出た豫園は、幾多の破壊と再建を経て公共性を獲得した。無数の創造意欲と善意がより集まって、文化財としての価値を高め今日に至った。

〔注〕

一　宮崎市貞『宮崎市貞全集　巻一三　明清』三～三九頁　岩波書店　一九九二年
二　薛理勇　『文以興游　豫園扁対、碑文賞析』　同済大学出版社　一九八七年
三　木津雅代　『中国の庭園』　東京堂出版　一九九四年
四　白幡洋三郎『庭園の美・造園の心』一二四～一二五頁　日本放送出版協会　二〇〇〇年

「受理年月日　二〇〇四年九月三十日」